国内活動

11/12･13	**【アフリカンフェスタ 2011】**にて活動紹介 **横浜・山下公園**
11/13	**【第31回 むさしの青空市】**にて活動紹介 **武蔵野市民公園**
11/28	**【日本中近東 アフリカ婦人会主催 第16回チャリティーバザー】**にて活動紹介 **ロイヤルパークホテル**
12/8	**カラ主催 チャリティーコンサート【かけはし2011】 銀座・YAMAHAホール**
12/9	**【仏語圏 日本人保健人材ネットワーク定例会】**にて講演 **国立国際医療センター**
3/31	**【国際ソロプチミスト東京・銀座チャリティーコンサート】**にて活動紹介 **ホテルオークラ別館アスコットホール**

<2012年4月以降の予定>

＊期日が確定していないものは事務局までお問い合わせください。また、変更になる場合もございますので、詳しくは事務局までお問い合わせください。

4/29	**東京女子大学【園遊会バザー】**にて活動紹介 **東京女子大学**
5/13	**【東京白梅会】**にて活動紹介 **中野サンプラザ**
5/下旬	**明星大学人文学部**にてゲスト講演 **明星大学**
5/中旬	**【アフリカン・フェスタ2012】**にて活動紹介 **横浜・赤レンガ倉庫イベント広場**
9/下旬	**【第23回 三鷹国際交流フェスティバル MISHOP WORLD 2012】**にて活動紹介 **井の頭恩賜公園・西園**
11/初〜中旬	**【第32回 むさしの青空市】**にて活動紹介 **武蔵野市民公園**
12/2	**カラ主催 チャリティコンサート【かけはし2012】 銀座・十字屋ホール**

からばす(Calebasse)−第27号− 2012年4月1日発行

特定非営利活動法人 **カラ=西アフリカ農村自立協力会** http://ongcara.org/

東京事務局
〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-1-6-102
Tel:0422-29-7640 Fax:0422-29-7688
E-mail: centre@ongcara.org

バマコ事務局
BP E367 BAMAKO MALI
Tel:223-2020-9096 Fax:223-2020-3589

支えあう喜びを新しい世代へ

からばす

Calebasse

企画/編集/発行 特定非営利活動法人
カラ=西アフリカ農村自立協力会

デザイン:DeeplusDesigns

Issue Number 27

第27号(2012年4月1日発行)

CONTENTS

p1 なぜアフリカなのか? JICA職員 伊禮 英全
p2 現地活動報告 ･････････････代表:村上 一枝
新事業の展開について
p4 M.ジャワラのマリ近況報告
p5 学ぶ喜び、アフリカにつなぐ
･････････宮城学院教諭 鈴木 理恵
p8 国内活動予定

なぜアフリカなのか?

独立行政法人国際協力機構(JICA)職員 伊禮 英全

最初から「引用」で恐縮ですが、明治学院大学国際学部の勝俣誠教授が、その著作の中で「アフリカは、我々自身の人間性を問われる場所だ。」という趣旨のことを書いておられ、その内容に深く同調する思いをしたことがありました。

コンゴ民主共和国やセネガルで生活していた時に感じたのは、人間の持つ弱さや強靭さ、卑小さと気高さ、おおらかさと計算高さ、したたかさとしぶとさ、命のはかなさとうつろいやすさ…云々と、人間という存在の持つあらゆる面を最も直接的な形で目にすることができたのがアフリカでの日々であったような気がするのです。それと同時に、庶民の毎日の悲喜こもごもの感情に相対峙していると、勝俣教授の言うように、「お前はどうなんだ?」と、自分自身という存在の「人間性」を逆に問われているような気持ちになることが実際、多いのです。

こんなことを書くと「アフリカの人たちは、感情の表現が直接的で、素直であり、赤裸々でわかりやすくて気持ちがいい。」という具合に矮小化されて受取られそうで怖いのですが、言い方を変えると、人間の醜さと気高さを、もっとも鮮やかなコントラストの中で抉り出し、また、同時に安全なところに避難して身を置いておきながら、批評家然とした無責任な立場から眺めている自分自身の醜さとずるさを引きずり出して見せてくれたのがアフリカでの生活であった気がします。

生きるということの切なさと悲しさ、運命というものに抗うでもなく、従順に従うでもなく、したたかに計算高く、逞しく生きている人たちを見ると、すべての感情の根源に共通してあるもの、おそらく、それはうまく表現できないのですが、「存在することの喜び」といってもいいものを力強く感じることが多いのです。そして、それは間違いなく「そこ」で「その命」を主体的に生きている彼らの中だからこそ感じることができたのだと思います。そうした「喜び」が「呼び水」のような誘因となって、いつのまにか遠来のアウトサイダーである自分自身の中にも「喜び」が湧き起り、私の中に長く埋もれて忘れられていたもの、ふつふつとわいてくる「生きていることの喜び」といっては大げさですが、とても元気になれる不思議なエネルギーを発散し始めるのです。

また、同時に、「生きる」ということについて、どれだけ私たちが真剣に向き合っているのか、根源的な問いを発し続けているのがアフリカのような気がします。私が真剣に向き合わなくてはいけないものに、私は正々堂々と対峙しているのでしょうか?それがわからなくなった時、無性にアフリカに帰りたくなるのです。

平成24年2月

からばす NO.27 2012/4/1 発行 http://ongcara.org/

新事業の展開について

村上 一枝

例年にない寒い乾季でしたが、2月末からハルマッタンが吹き始め暑い季節になりました。

1.外務省支援とJICA支援事業について

■外務省支援による支援事業

クリコロ町の手前のスウバ村に現在待望の診療所が建設中です。建設と自主管理の指導をジャワラが、住民への啓発教育（公衆衛生、病気予防、出産と家族計画）について村上とアワが、4日間の研修を担当しました。村には意識の高い人が多く電気も水道もありますが、非常に不衛生なため、このままでは診療所が開設しても病気が減少するとは思えません。とにかく清潔にするよう指導しました。

■ＪＩＣＡ支援による支援事業

こちらは基礎教育支援事業です。マリで始めてのフランス語の識字教師育成研修会（以後C-A）、このレベルに未だ達していないバンバラ語識字教師の強化育成研修会（以後C-B）が行われています。この識字教師育成研修会は、旧事業地の事業対象村が86カ村・3コミュン（ドゥンバ、クーラ、トゥグニ）です。研修会への出席状況、積極性、自主参加の希望、C-Bの試験の結果等を比較すると、圧倒的にバブグ研修会場が一番良好な成績を占めています。

2000年にカラがトゥグニコミュンへ移動後、この地域の管理は村の青年の手により、我々は何の手出しもしていません。結果それが人々に逆に積極的な活動参加を生んだのかも知れません。農作業に追われて欠席する人もいますが、バブグ会場は常に全員参加で、試験の満点者が3人もいます。

この事業と合わせて、新規に10カ村へ識字教室を建設しました。建設内容はかなり改善され、村の左官の技術指導、シロアリ被害を防ぐ為に屋根の総ての支柱を木材から金属製に変更し、トタン屋根の正しい設置法も指導しました。

2.村間の問題発生

種々の事業展開中に色々なことが生じました。識字教室建設が改善され、近郊の村と違うという理由で村間に感情的な問題が発生するということでした。そのために急遽従来通りの方法で建設した村もあります。このようなことが村間であることは聞いていましたが、今回皆様からのご支援により建設開始となる3カ村の産院建設についても、アフリカ人のカラスタッフに対する村人の誤解・邪推があり、スタッフは非常に不快な思いをしていました。その為私は3カ村を巡り、村長・長老・女性・若者代表に産院建設の意味や後々の村での管理、建設資材、費用等のことを力説し、村からの要求には絶対応じない旨をきつく（いつもきついのですが）主張して歩きました。このような経験は初めてです。

3.村の人たちの喜ぶ活動

これは何と言ってもエイズ予防です。村に楽隊が入るのが楽しくて仕方がないようでした。始めて行ったソモノダガブグーという村には、学校も井戸もありません。人々はニジェール河の水を生活用水としています。でもこの村はお金持ちです。河で獲れた魚と河辺に生える特殊な草の根の販売（水をいい香りにする）、対岸から仕入れたお菓子の販売が大きな収入だそうです。モバ村から17kmも遠く、女性への衛生指導にアワが行った時は村に泊まりこみましたが、トイレがないので河を使ったと笑っていました。でもこの指導の後からは「子供たちの下痢が減った」と村長からお礼にニワトリを1羽貰いました。

4.アフリカ時間

ある日、運転手のセイドゥとバマコからコニナ村へ行く途中、ベレニコ村を通った時のことです。その日は女性貸付け事業の返済日で、女性センター前にアワのバイクがあったのでちょっと立ち寄りました。12時半頃でしたが、アワと10人前後の中年女性たちしかいません。この村は確か100人以上の女性が貸付けに参加しているはずです。聞いてみたら、昨晩役員の女性達が「明日返済日だから9時集合」と一人ひとりの家を廻って歩いたそうですがまだ集まっていません。アワは「いつもこんなで午後2時頃にならないと始まらないの」と言うのです。私も付き合って30分待っていました。やっと来た女性に「どうして遅いの？　今まで何をしていたの？」と聞いても理由も無く、毎回この様な状況だそうです。

あまりにも無責任な人たちが多いので、その日は非常に怒って返済中止にさせました。1週間後に役員が謝りに来て再開することとなり、今度は集合時間にチャンと集まっていました。私も目を光らせてアワを手伝いましたが、122人が集まった狭い女性センターは私語で非常に騒がしく、ナントいくら注意しても聞き入れないのです。アワは顔面真っ赤になって声が割れそうでしたが、なんとか無事終了しました。

一人ひとりの名前を聞いて書き込み（同じ名前の人が多いのも厄介です）お金を返済して、大声で集まったお金を数えた後、同一額を122人に貸し付け、余ったお金を年寄り優先に更に貸付けるのです。残った小銭は村の女性金庫（直径15cmの薬箱）に保存します。本当にガラス張りですが、なんと不合理な方法でしょう。でもこうしないと全員納得しないということでした。

この集合時間については日本も同じようなことがあるとは思いますが、これほどではないでしょう。エイズ予防キャンペーンでも同様でした。今回2ヵ村で開催しましたが、ソモノダガブグー村は集合時間に広い日陰をつくる樹の下に集まって私たちの到着を待っていましたが、一方バラバン村では我々が到着して、村人に声をかけて皆を呼びに行ってもらい、長々と待ってから始まるのです。だからと言って不真面目ではなく、感覚の違いなのです。が、大変に疲れる一日でした。

M.ジャワラのマリ近況報告

カラ会員のみなさまお元気ですか。最近のマリの事情をお伝えいたします。

現在マリが抱える一番大きな問題は北の問題です。故ガダフィー大佐の国際軍隊に参加していたトアレグ族の人たちがガダフィー大佐亡き後、新政府から除隊させられ出身のマリに帰国しました。4部隊のうち3部隊は持ち帰った武器弾薬をマリ大統領へ差し出しましたが、しかし残りの1部隊はそのまま保持し、アザワー【AZAWAD】と呼ばれるトアレグ族居住地域で、独立を叫んで戦闘を繰り返しています。

この人たちは30万人程度で、少人数がグループとなり、この地域に住む善良なトアレグ族や他の多くのマリ人に対し強盗殺戮を繰り返しています。その為、約10万人が国外へ難民として避難しています。

大統領は彼らと話し合って解決しようと試みていますが全くその兆しは見えず、多くの死者が出ています。フランス政府もマリに話し合いに来ていますが、解決の兆しはありません。

次いで4月29日に実施予定の大統領選挙がこの北の問題の為に行われるか否かという問題もあります。一部では「モプチ周辺から南部だけで選挙をしよう」と言う声もありますが、それは正しくない、予定通りに実行すべきだ、と私は考えています。

しかしマリにとって嬉しいニュースもあります。今世界で問題とされている環境保護に関し、マリの環境庁は市場で使用している黒いビニールの買い物袋の生産停止を決めました。既に生産された在庫品だけ使用可能です。町が多少は清潔になると思います。

それから、2012年のサッカーアフリカンカップで我がマリチームが3位になったことです。これからチームを強く鍛えるそうです。

最後に、各リジョンでフェスティバルが開催され、部族特有の音楽や衣装、工芸品が公開され多くの外国人観光客が訪れました。北部のトンブクトゥでは軍隊に護られながらのフェスティバルとなりました。

学ぶ喜び、アフリカにつなぐ ～女性の自立支援に取り組んで8年間の歩みを辿る旅～

宮城学院中学校高等学校教諭 鈴木 理恵

1. 2004年「NGOカラ」代表村上一枝さんとの出会い

西アフリカ・マリ共和国の貧困を救うために、わたしたちも力になりたい。同国の支援活動を続けている非政府組織CARA（代表村上一枝さん）の活動を英語の授業で学んだ高校2年生がこの支援活動に取り組んで8年目を迎えました。

教科書にあった『隣人の家が火事になったとき、あなたは助けませんか?』という村上さんの言葉に多くの生徒が共感しました。また、歯科医だった村上さんが48歳の時にその仕事を辞めてまで西アフリカに懸けた、その生き方にむしろ心を打たれたのだと生徒は話しておりました。

「勉強して終わりではなく、自分たちも何か役に立てないか」。そんな思いを中高生が引き継ぎ2006年、宮城学院創立120周年の年に「マリ共和国へ識字学校を贈ろう!」と中高生が一緒になり文化祭で自分たちの手作り品によるバザーを企画、運営しました。さらにPTA、中高の教員が参加して夢のようなプロジェクトを実現させることができました。

この思いは、126年前の宮城学院も米国人の募金によって、ボランティアの精神から立ち上がっていること、明治のはじめに女子教育をスタートさせた本校の歴史に重ね合わせた宮城学院創立の原点に立ち返った取り組みとして展開されました。

この支援活動の中で生徒たちが特に力を入れているところは、「女性の自立支援」を目的にしている点です。マリ共和国では15,6歳で結婚をして母親となっている現状を学び、劣悪な衛生・栄養環境から乳児の死亡率は日本の30倍、エイズも拡大の一途、また一夫多妻制度の社会における女性の立場の低さから、女性が村で自立した生活ができるように願い、そのための具体的な支援を村上さんと相談しながら展開してきました。この支援する内容を「相談して自分たちで決める」という方法が生徒の意欲を掻き立てました。

これまで多くの生徒たちが経験してきた献金や募金活動は協力金を送ることが目的になっていました。しかし村上さんは生徒にマリの実情を伝え自分達に何ができるのかを考えさせるところにボランティア支援の本当のあり方を問いかけたのです。それは、村上さんの活動の原点ともいえるとらえ方だったのです。文化祭のバザーへの取り組みを通して8年間も継続させてきた原動力は支援のあり方を生徒自身に問い続けてきたところにあったのです。

そうしてたどりついたのが「教育の必要性」でした。本質的な自立は教育にありました。文字が読めないために殺虫剤と粉ミルクを間違えて飲ませてしまい我が子を亡くしてしまった母親、お金の計算が出来ないために厳しい自然環境の中、丹精こめて作った農産物を安く騙し取られてしまうこともあるそうです。このような現実を提示され学ぶことが命を守ることであり、生きることにつながることを知らされました。（次ページへ→）

もちろん最低限の生活物資は必要とされますが本当に必要なものはお金や物だけではないことに気づかされていきました。

今この識字学校では、連日多くの老若男女が夜遅くまで自ら時間を作り学んでいます。遠いアフリカの片隅にある世界の果ての最貧国である「マリ共和国」が私たちの隣人となったこの取り組みをこれからも大切に支えていきたいと思います。

2. 人が人を動かす

実は、生徒はNGOカラの活動内容に共感したのではありません。村上一枝さんという一人の女性の生き方に心を動かされたのです。当時、英語の授業を担当していた教師に生徒が感銘を受けていることを伝えると大変驚いていました。全く知らなかったというのです。自分は英語の教師として英文法や構文を一生懸命教えていたといいます。生徒は「このまま歯科医でも十分納得の行く人生を送れるはず、なのになぜその生活を辞めてまでマリの支援に自分の人生を懸けるのかと」そして、教科書にあった『隣人の家が火事になったとき、あなたは助けませんか?』という村上さんの言葉に多くの生徒が共感したのです。さらに村上さんは言います。「支援の手はインドネシアやカンボジアなど東南アジアまでは広く届きます。しかし、アフリカにはまだまだ目は向けられていない。私の活動の地はユニセフでさえ入らない地域にある。」というのです。首都バマコより北東へ220キロ、クリコロよりさらに100キロ北上します。　現地では村上さんは厳しい存在でした。必要とされないものは絶対にあげません。支援したものが見当たらなければ必ず探します。筋の通らない要求や、要求されたものが活用されなければとことん話し合います。いずれ自分がいなくなっても自立していけるような生き方を支援しているのだと思いました。

3. ボランティアとは　～人とのつながりを築くこと～

文化祭でのバザーの活動は長い間宮城学院中高で取り組まれていたことです。しかし、以前のその方法は収益金を得てから「さあ、今回はどこに支援する?」といった話し合いでした。目的がはっきりしない取り組みは、バザーへ出す作品の質、量とも提出状況が良いとはいえませんでした。そこで逆の手順を取ってみたのです。どこへどんな目的で支援したいのか。目の前に相手が見えると意欲は湧くものです。
村上さんを介しての往復でマリとの交流は8年目を迎えました。その間、識字教室で字を学び「生まれて初めて自分の名前を書くことができました。」というお手紙を頂きました。そして昨年は、識字教室を贈った村の村長さんから震災見舞いのお手紙を受け取りました。現地のバンバラ語からフランス語へそして日本語へ訳されたものでした。その時、はるか遠いマリが身近につながったように感じました。

これまで支援の多くは物品でした。しかし、絶対的に物資が不足しているとはいえ物の支援には限りのようなものを感じていました。与える側と受ける側、ボランティア活動のマンネリ化、活動意欲につながる新たな関わり方は何かと考えた時、それは物ではなく人との交わりだと思いました。生徒が始めたマリとの交流が更なる展開を築くために、私はマリへ行ってみようと思ったのです。

村上さんが20年かけて創りあげた輪の中に私も入れていただき、生徒が創り上げた女性の自立支援への取り組みの8年間を辿ってきました。
マリの民族衣装に身を包み堂々とした風格の男性、そして素敵な笑顔と凛とした品格を感じさせる女性達。一食一品の食事だけれど食品のバランスのとれた手間隙をかけた食事、日の出と共に始まり日没と共に終わる1日。豊かさと幸せの本当の意味を考えさせられました。電気や水道がなくても、そこに人々がいて人が生まれ生活が営まれています。

本当の支援とは何かを考えた時、マリが発展し自立できるようにフェアな国際関係をお互いに築き結んでいくことではないかと思いました。その第一歩が人とのつながりを創ることだと思います。細やかな心配りをしていただいたセイドゥに人の心の温かさを思い出し、何でも手際よくこなし、地域をまとめている笑顔の素敵なアワが私の憧れの女性となりました。そして今回の訪問で私の宝物となった出会いは、ママブグ村の女性センターで出会った女性たちです。

世界の最貧国、西アフリカのマリにみた物資の圧倒的な不足と近代化の遅れ。さらに追い打ちをかけるような厳しい自然環境。しかし、そこで教えられた生活の知恵や食文化の豊かさ。そして、そこで出会った女性たちの笑顔に現れる凛とした品格に圧倒されてきました。